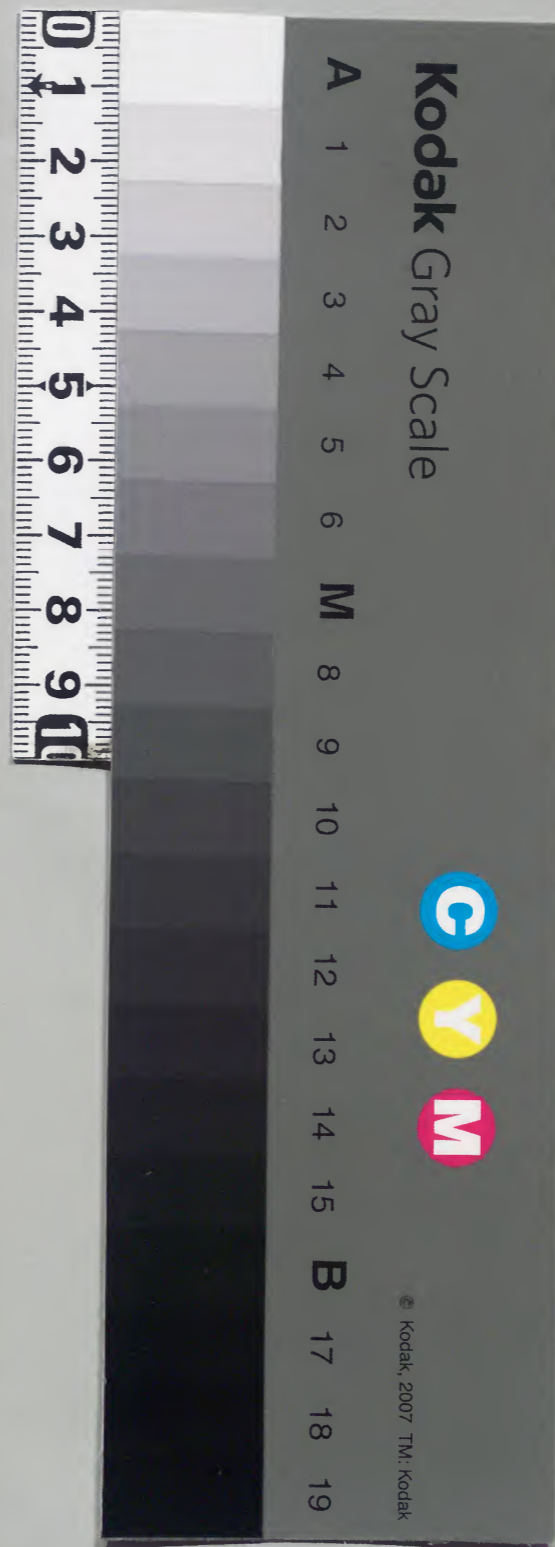


寛永諸家譜

藤原氏士四冊之内一
為憲流

110

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 (110)
函號	特 76 1





畠部

六郷

奥山

藤川

宇作舟

寛永諸家系圖傳

淺草文庫

藤原氏

十一南家

為憲流

畠部

大織冠三代

武智磨

し磨

須三佐

冬議

治部

母々大納言正之位右藤がむじま

是云

神祇大納言 少納言式部大納言

左之位右大弁 式部卿 春交大夫

右大将 中衛大将

母々左之位下石川連藤がむじま

雄友

正二位大納言 母々藤原がむじま

弟河

左之位下 越前介 伊賀守

母々正四位下石川恒守がむじま

高枝

左之位上 伊賀守 右衛門尉

清夏きよなつ

上總こうそう

後白ごしろ

大少おほしう

母はは後立ごたてと板いたと関守せきりょうがじよあ

維い幾けい

後立ごたて

常じょう隆りゆう

後ご波なみ

左ひだり衛ゑ

乃の憲けん

后立ごたて

重おも物もの

妻つま守もり

重おも物もの何なにと孔あなと一ひとつとくとく工く者もの也なり

号ごう寸すん世せい一ひと工く者もの大おほ久ひさと一ひと母はは平ひら言こと也なり

王わうのの心こころ也なり

時とき理り

后立ごたて

時信 ときのぶ

従五位下 よいかげ 駿河守 すまの

式部 しきぶ 式部 しきぶ 時理 ときり 舎弟 しやてい たり

維永 いなが

従五位下 よいかげ 官本系為 くわんぽんけいゐ 維清 いせい 守 し

維清 いせい

入江右馬允 いりえうまのぎ 従五位下 よいかげ 大史 おほし 史 し

維總 いそう

如越后郎大夫 ごとくえちごろうだいら 清總 きよそう 史部 しぶ 指守 さしもり

泰總 やとそう

指守 さしもり 忠總 ちゆうそう 八郎 はちろう

長ちが繼る

小次郎

家いへ繼

左京いさぎよ右みぎ京きやう左ひだり京きやう右みぎ京きやう

康やま繼

大おほ郎らう掾えん守しゅ

照てる繼

次郎

時とき繼

右みぎ衛ゑ

某なにか

和わ泉いづみ守しゅ

良よ喜き

石いし見み守しゅ

某

石見守

某

次郎

常とこ子こ某なにか

美み濃のう守しゅ

正ただ繼

次郎ついで右みぎ衛ゑ守しゅ

又常々とむかへく今川政子此
十六歳のときより多く戰場
とひく甲首二級を以て
幼氣とありありと誓志と正徳軍功
あるふりく女佐の儀と
永禄十一年武田信玄後府の城と
今川氏実母を執事あるに
遠列を川へりぐる正徳城を海より
あせをよせく信玄教日せむ
す

信玄をよふ正徳が人質と執り申列
正徳をよふ正徳をよふ正徳をよふ
居しむたれし

東照大指現後府

清水ありしとき
通し御自筆の御書と
あつるその

あつるその

是より申す事ありしにあらざりしに書

及し申す事ありしにあらざりしに書

御事にてあり

之方御事儀に先んずりて御事

他御事にて申す事ありしに書

之方御事にて申す事ありしに書

御事にてあり

八月廿日 家康御判

豊後島太ら

天正十年信長甲列し出陣の事

大権現後列をいふ甲列をいふ

是より正徳に及ぶ事あり

海よりいふ事あり

同年六月明智光秀信長と戦

大権現和泉境に及ぶ事あり

海よりいふ事あり

おひらき一六月七日、御書と正繼

しよりりしれしとせよとい

は時より山（おうつら）城見立

ふらんちとせむくいあゆみ進ませ

つしそ、斗

六月、家康御判

是日

あけりらうひて

明細光秀を長秀吉のしあにあらびぬ

あれらうしに信忠甲列を川尻とせ

しゆりお主人信忠の薨去をゆめと

おえはあの様へ

大指現正繼とつらうれ是とあづりし

お人あづ川尻をあらしつら正繼と

しよしよ

大指現甲列し出陣しよしよ

しよしよ大軍をあらし甲斐信濃

をとりよ

大指現府城おほさしげん一海うみ一將しやう

七人軍しちにんぐん出三千餘騎しよせんごをけりし水原みづはら

通路すうろとえざりたもいふ所謂酒井忠次すゐせうしゆんじ

大久保忠世おほくぼしゆんせい大久保忠房おほくぼしゆんぶ中多康重なかつたかひさしげ

石川長門守いしかわながちのり穴山あなやま正徳しやうとくし事こと一陣いちじんす

水原みづはらの四方よしかたの子騎こしげと引ひびく梶原かぢはら原はら

陣じんとすれあひあひ一里いちり山出さんしゅつとくさびへ

たびたび一いちきりきりのちのち一いち苑脚いんきゃくありと

急いそをけり部將ぶしやうを引ひくはれとせん

寺沼井てらぬまゐと大久保おほくぼと殿とのとけりし

て軍ぐんと水原みづはらが先陣せんじん原野はらの

充滿じゆんまんと正徳しやうとくををかへりし殿との

をとりし五ご里りのあひあひと款くわんとく

あしむ板いた十じゆ余よ度どあひあひととかひかひ所しよ井ゐ

やあしむ諸軍しよぐんと金かねとくとくと人ひとその

勇ゆうとくとくすのち軍功ぐんこうとくとく

甲列かうれつ駿列せんれつののちちををひひくくせせととくく

十貫文の領地とすぬり
天正十一年病死四十二歳
好名道麿
法名

長盛

孫四郎 後内膳正一
母三浦上野女
天正十二年二月十日又正徳改督と
すぬり七千六十貫文の地を領せ

同年四月九日尾列長久手合戦の時
長盛が兵をまつくを長秀次の擧と
やうらうら甲首二級をゆり
同六月十七日前田某龍川一益をいふ
九鬼をむきいさ解けりこもさく
謀叛をとけり長盛津鴻あり
てあれとすいふなりせりりて前田
川をさへり兵船を乗りり龍川が
智を生捕とくへり

日十二年の夏 命ありく大久保
七郎左衛門尉長盛の弟七郎左衛門尉
自針頼甲列先方取らるるに長盛
佐列しりく去回りてこれと回乃
城とせし国八月二日四方に寄りて先
三丸を攻めやこれ去回父子はもく
あひうらふ授けよ寄りて敷小を去乃
と此大久保七郎左衛門尉長盛は川を
をひくこれをおせざらん

去回二度たかよよとてこれ去を治
く城しりてうらち去回と城外
しそそく寄りの虚実をうかひて
これしあつる事投度寄り物
見乃毒をささげりてこれをあせんと
いども味くさる利をうらまふ
日月二十日長盛が弟あり去回又
子九子おもしろくしりてせんと
おもしろく長盛柴田しりて終

いづれにやまゝにふりて殺別よとて
照つて殺十人を討捕去回軍
く城中に入て盛勝利をうけのとも
むき演ねりて進す

大権現より軍功を感し
あつて即後九人との御感
状をたすれを盛りて
乃うつりてい

と度お電子表りも子碎動候

感入以殊とち方
いせは又神妙以即
お國ゆきの深
村と孫大軍の尉一戸

後八月廿一日 赤康御判

忠節海軍馬

天正十六年四月二日
のとき後立伝下りて叙し内膳正

一、
一、

同十八年上総下総五郡のうらり

をひく一百二子石の領地をなす

是年又年上総京勝謀叛乃時野列

那次黒羽根陣より先を押し

同十四年八月丹波乃龜山をひく

二万石をなす上総下総の領地を

く三百二千石なり

台徳院殿より龜山に手書し

領地二子石に如坊をくす

同十九年大坂御陣乃とも長盛又

子丹波流くあやしく天満は乃奇手

とを託け長大坂和をく

元和元年大坂の乱よりお

大権現

台徳院殿御上御あり長盛又子在京す

と此より丹波より凶賊惣部せん

正なりつげあり

大権現

台徳院殿乃 作をかりしり長盛又子再
山松平周防守と龜山乃賊を
海より玉中此賊徒を一つに
元和七年八月龜山をうつり同玉福智
山よりうつり所銀一萬六千石此所防を
たまより都合又可石を銀知寸
寛永元年九月浪列大垣乃城より
よりく五百石二百石解とく海より

同九年十一月二日大垣乃城より
六十又歳ありて卒次 法名金室
久要 院號雄心

女子

大権現乃御類女よりして細嶋伝浪より
嫁しり母之松平後守が女

宣勝

義濃也

母之妻平國持之康元之女

大権現乃御母堂ありをやりし給ひ

大権現の御いさうとふたごころ御城

しるこれを嫁せしめしむ

長十四年十二月二十八日没位下

叙一長濃守し任じ

寛永九年の冬、在國が治職をすまは

日十年四月大領をくくあり橋列

龍野をへぬし地もものごと

日十三日龍野をへぬし橋列を概

をへぬし地もものごと

日十七年九月を概しり泉氏居和田

乃城しりつり一万余とくし海しり

地く六百石の地を領じ

女子

織田刑部大輔の妻母ハナハナ

女子

かきも羽を妻死と母なる

興賢

母波守 母あり

元和七年十二月二十八日没立伝下

叙一母波守一任

寛永十又年四月二十又日御小姓

組のくみ頭

日十八年六月廿日少姓組の番頭

たり

長政

女子

寺次名庫頭が書死す

女子

大久保宗二郎が書

久高

太田忠清の尉

壽昌 じゆうしやう

出家 しゅつが

某 なにか

大吉 たいきち

行隆 ぎやうりゆう

内膳正 母 桑山 伴實守 うちぜんのまゝ かつやま はんじつしゆ

寛永十七年十二月二十九日 没 立位下

叙 内膳正 じゆ うちぜんのまゝ

女子

松平 圓房 すずのの 書 母 くま 一 いち 一 いち 一 いち

高成 たかなり

主税助 母 前 ちゆうぜいのすけ 母 前 まへ 一 いち 一 いち 一 いち

某

大京 おほみやう 母 同前

某

造酒 ぞうしゆ 母 同前

家乃紋いへのみ

たばたば

紋もん

紺白こんしろ

幕政まくせい

● 集

巻部

河村くわむらととた清しみず尉ゑい 生なま玉たま後ご河が

今川いまがわ氏うぢ志し一いち了りょう後ご列れつををひひく

死し正せい

某

自水正 牛島 川村と号す

東照大権現駿列しんとう一いちおおりりししすす時とき

ししるる自じ水すい母ぼ志しりりししりりととししりりとと

氏うぢ志し波な落らく乃のちち孝こう列りつ濱はま松しょうありり

ををめめささははくく

大権現おほごんげん一いち福ふく一いちししくく海うみつつるる

台座院たいざえん殿でん御ご誕生たんじゆししるる母ぼ志しりりととししりりとと

保護ほご一いちたたくく海うみつつるる志しりりととししりりとと

台座院たいざえん殿でん一いちししくく海うみつつるる

大権現おほごんげんのの約やく命めい一いちししるる母ぼ志しりりととししりりとと

ををししりりととししりりとと

長次ちやうじ

長次ちやうじ守しゅ 生なま園えん同どう前ぜん

大権現おほごんげん一いち母ぼ志しりりととししりりとと

長次ちやうじ越こ前ぜん中ちゆう納なつ言げん秀しゆ康かう乃のちちししりりとと

乃のちち越こ前ぜん糸いと儀ぎ忠ちゆう昌まう一いちししりりとと

をいへて戦死也

表次

内記 生園下野

孝長十二年十月某日

白滝院殿より湯へたくしつり御事

らく此よりすつるに二三年なり

將軍家よりつるにすつるなり

元和二年秋地又百名をいへり

感次

三之巻 生園氏苑

又表次が家督をいへり

將軍家よりいへり

元重

言書 生小氏苑

白滝院殿よりつるにすつるなり

を
律
助
也

家
乃
紋

巴

畧部

貞總

与也吉湯

生園後河

今川乃家

永祿九年八月十五日六十二歳

法名無三

長總ながそう

庄ちや内門尉 生國なまくに同前

東照大権現とうしょうだいけんげんににんたぐほつり鉄炮てつぱう
の卒うつ五十人をあづぬら

台徳院殿たいとくゐんゑんににんたぐまつれ

元和元年三月二十七日げんわげんねん二十九歳

去いく死しと 法名ほふな桃源たうげん山さん

一いち總そう

庄九郎 生國なまくに氏うぢ統とう

台徳院殿たいとくゐんゑんににんたぐほつり大坂おほさかお度おど

乃御陣のごじん小井こゐと主斗ぬすむ以もが總そうよ去いくし

戰場せんじやうに侍奉しやうぼうして首くび二級にきゆうとぬら

うねら

將軍しやうぐん家けににんたぐまつれ

寛永十年十二月かんゑうじゆんじふにがつにじふにさいしやうて

死しと 法名ほふな弘山こうざん宗白そうはく

永繼

庄左衛門尉 生國日前

將軍家より賜^{たま}りし御^ご書^{しよ}に大^{おほ}に

御^ご陣^{ぢん}より

白^{しろ}旗^{はた}殿^{どの}より借^かりて首^{くび}二^{ふた}級^{きゆう}より

揚^あり

將軍家より御^ご書^{しよ}に御^ご書^{しよ}に

御^ご陣^{ぢん}より

元^{もと}和^わ八^{はち}年^{ねん}十月^{じゆつ}十五日^{じゆふご}二十^{にじゆ}七^{しち}歳^{さい}より

元^{もと}和^わ八^{はち}年^{ねん}十月^{じゆつ}十五日^{じゆふご}二十^{にじゆ}七^{しち}歳^{さい}より

正繼

庄左衛門尉 生國日前

元和九年三月

將軍家より賜^{たま}りし御^ご書^{しよ}に

寛永十年正月より御^ご書^{しよ}院^{いん}より

御^ご書^{しよ}

重總

在四郎

生國河

台渡院殿

在津新

其新

北軍家子此久

家紋

巴

● 集

何波守 あいのこ

六郷 ろくごう

二階堂乃末流ちり出羽五山令郡 このま

六郷一任とれゆふふつと長 なが

通行ちゆうぎ

彈正だんしょう

東照大権現より此へてつれ

五月廿六日六月十三日

一七

法名光蓮

改系かへい

後立位下

出庫改

大権現乃麾下きりか下りし属まゝせん事ことをあらひ
をいふと教しゆ度と合あ我が一いつ軍ぐん功こうととあ
すす改系かへい成人あつじんありしハ討死うちじありしハ
病まひをうりありしれおり

同年十一月揚列大坂よりしるを
大権現を孫湯と山々乃戦功をきし
りさきとく

大権現

台徳院殿より御腰物をお給と其の
りら

大権現より舊領外此と人合色を
くらへしゆり常陸州府中より元
都合一石を給知す

大坂五度の御陣より^{さうか}是酒井家^の尉
忠次が^こ領^を居^りし^く供奉^に

元和九年十月十八日

台徳院殿より^お給^り列^府中^にを^あり^しあ
羽列^中行^郡を^しひ^く食^邑一
百石^乃加^倍を^お給^り都合^二石^を給^り
寛永十一年四月二十八日六十八歳少く
卒^す法^名茂^実

政勝 まさかつ

長五郎

伊賀守

元和元年正月八日

右衛門殿 ごうもん 御 ご 下 くだ 御 ご 下 くだ 御 ご 下 くだ

寛永十一年六月六日 御命 ごんめい 下 くだ

又 また 御 ご 下 くだ 御 ご 下 くだ 御 ご 下 くだ

日十七年十二月二十九日 御 ご 下 くだ 御 ご 下 くだ 御 ご 下 くだ

叙 しよ 伊賀守 いがのし 御 ご 下 くだ

政俊 まさとし

右十郎

伊賀守 いがのし 御 ご 下 くだ 御 ご 下 くだ 御 ご 下 くだ

在 あ 御 ご 下 くだ 御 ご 下 くだ 御 ご 下 くだ

政秀 まさひで

右十郎

伊賀守 いがのし 御 ご 下 くだ 御 ご 下 くだ 御 ご 下 くだ

在 あ 御 ご 下 くだ 御 ご 下 くだ 御 ご 下 くだ

菓

伊織いおり

家紋

三龜さんかめ甲かぶ乃の内うち七しち星せい

●
重和

惣内 生玉守江

甲列武田氏一

奥山

本を伊豆國一任志と藤と号
一申比事列奥山一任志於ゆ
小奥山と号は

長文十一年七月十七日八十歳
死す 法名月秋

重次

茂左衛門尉 生玉河

天正十一年

東照大指現 湯川

長久手小田原朝鮮乃御陣

をつとむる

台徳院殿 宇都文高陣

に侍

長七の御鉄炮玉

ありと同心二十五人をつけ

日十九年元和元年大坂夏の陣

小志

元和七年二月十八日六十歳

死す 法名桃岸

安重

茂家^もの尉

生國^じ武苑^し

元和五年

白河院殿を^{こい}修^{せい}す

寛永九年

將軍家より之よりく海つれ

同十年小十人の組頭とすれ

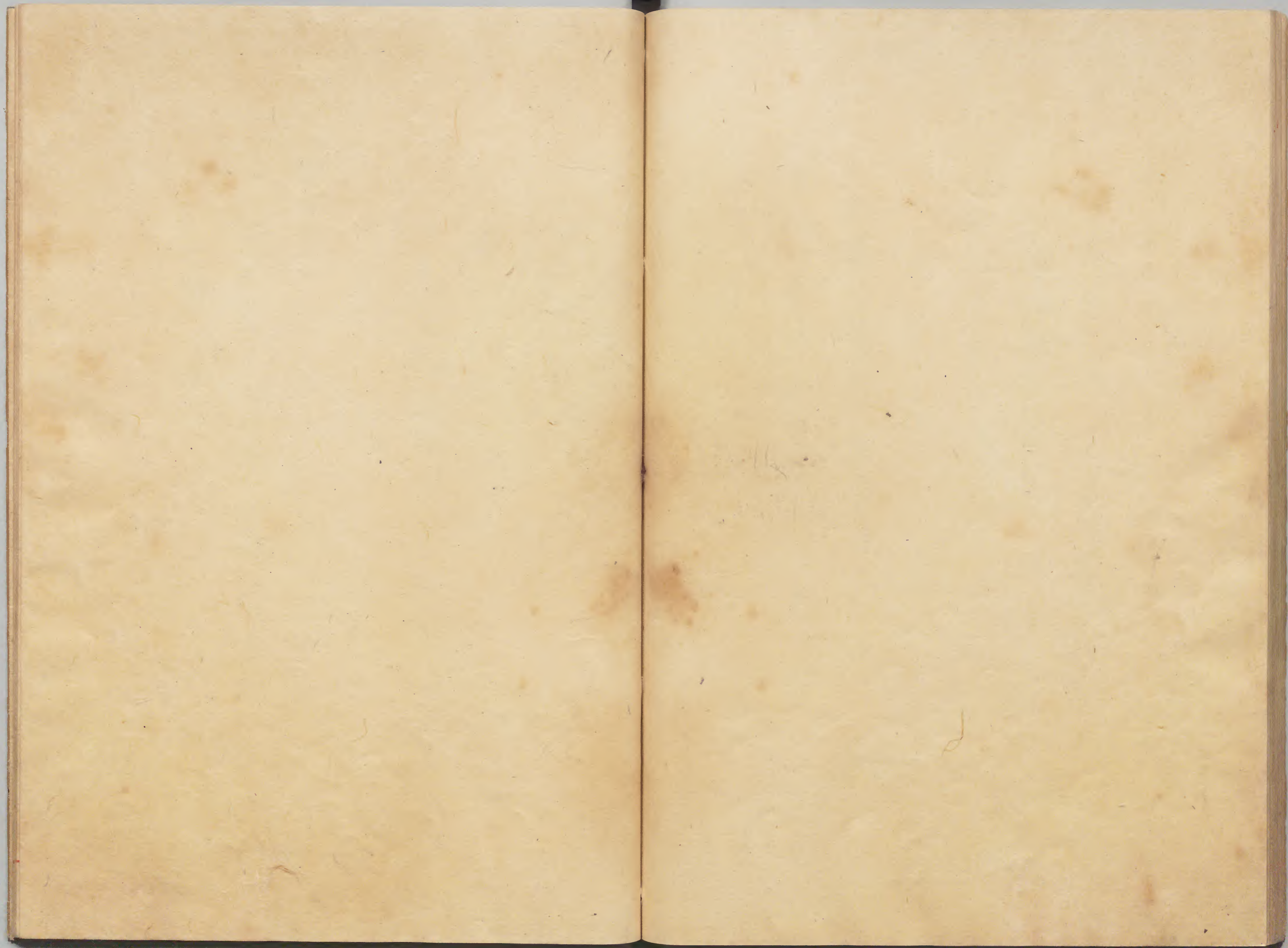
重正

友十郎

生國同家

家乃紋

庵乃内^い木^ま肌^ま



藤川 ふじがわ

本工友氏と重安後川と様

● 重義 しげ

工藤中 伴勢小廻 いとうちゅう ばんせいこまわ

伴勢 ばんせい

重安 しげやす

十名塙

生和同前

織田信雄 おだのぶひでお 一 ひと 世 よ とき 信雄 のぶ 乃 なり

命 いのち 一 ひと 工 く 友 とも 在 あ 一 ひと 乃 なり

藤川 とうがわ と 孫 まご 也 なり

天正十八年 てんしょうじゅうはちねん 乃 なり

大権現 おほごんげん 一 ひと 乃 なり 一 ひと 乃 なり

寛永三年 かんえいさんねん 八十八歳 はちじゅうはちさい 乃 なり 一 ひと 乃 なり

重勝 しげかつ

甚 しん 乃 なり 一 ひと 乃 なり 生園 せいえん 同前

慶長二年 けichoにねん 乃 なり 一 ひと 乃 なり

大権現 おほごんげん 一 ひと 乃 なり 一 ひと 乃 なり

同前

台座院殿 たいざえん 一 ひと 乃 なり 一 ひと 乃 なり

寛永十年 かんえいじゅうねん 又 また 十又歳 じゅうまたさい 乃 なり 一 ひと 乃 なり

重信しげのぶ

孫十郎 生玉日前

台渡院殿

將軍家一勤仕まこと一まこと海川うみがは

寛永十年四月十六歳しほ一しほ死し

重政しげまさ

左衛門 生國同前

重房しげふさ

孫十郎 生國武苑

伯父重信ちちのちげのぶが喜よろこ子ことて新實あらたまこと八重政やえまさが子こ

なり

寛永十一年

將軍家一しほ一しほ海川うみがは

重之しげのち

勝次郎 生國淡波うら

寛永十年しほ一しほ死し

將軍家
一
一
一
一
一
一
一
一

家紋

横木臥

字依每

● 長元

物者米の厨

生園亭

東照大権現

元和元年十月十一日七十歳

死

長歳ちがし

勅太皇太后 生國駿河すまが

元和元年七月七歳しちさい

大権現小浜湯こいづ

日三年

台徳院殿たいとくゐん 為礼ためらい 乃なり ち ありせと

加か 山やま 寺てら

將軍家しやうぐん 一ひと 所ところ 一ひと 一ひと 返かへ 一ひと 所ところ

寛永十二年かんえいじふにねん 一ひと 死し 一ひと

長次ちがじ

檜物ひのぶ

寛永十三年七月しちがつ 一ひと 所ところ 一ひと 死し 一ひと

將軍家しやうぐん 一ひと 所ところ 一ひと 死し 一ひと

家乃紋いへのみじん 孫子まご

